

カリキュラム・ポリシー（教育課程の編成方針）

食農学類では、「実践性」「学際性」「国際性」「貢献性」の観点からディプロマ・ポリシーを定めており、その達成に相応しいカリキュラムを以下の方針で編成しています。

【履修コース共通のカリキュラム・ポリシー】

． 実践性を重んじるカリキュラム

カリキュラムでは各科目の専門性を十分に確保すると同時に、それが農林業・食品産業・地域社会の具体的な課題と結びついていることを、学習の初期段階から伝えなければならない。この点を考慮し、本学の科目カテゴリー「問題探究領域」の一環ではあるが、他学類より半年間前倒しをして、農学フィールド基礎実習を1年次の前期・後期に配置する。これは動植物に直接触れる機会を早期に提供することで、実践的な農学への高い意欲の醸成と持続を図るためでもある。

． 学際性を重んじるカリキュラム

農学には地域環境・農林業・製造業・流通業等の連鎖に対応した多彩な専門領域があり、作物生産自体の高位安定化にも多くの専門領域が関与している。いずれも異なる専門領域によるチームワークの水準が全体の成果を左右する。この点を考慮し、1年次からの「農学リテラシー」の科目群には学際性を重視したオムニバス講義や理解しやすい入門的・概論的な講義を配置する。また、 に記載の農学実践型教育を異なる履修コースの複数教員が担当する点も、学際的な理解力と発信力の涵養に配慮している。

． 国際性を重んじるカリキュラム

農学の最新の科学的知見はグローバルに共有されている。履修コース別の専門科目では最新の知見を丁寧に解説するとともに、国際経験豊かな教員による講義や演習を中心に、農林業や食品産業の国による特質を具体的に伝授する。グローバルな問題意識の涵養には、地域の個性的な食品や伝統的な慣習の背後にある国境を越えた普遍的な要素を学ぶことも大切である。科目を例示すれば、自然科学領域では地域の名品を支える発酵・醸造学があり、社会科学領域では共有資源管理の論理を学ぶ農林資源経済論がある。食農学類の教育は直接・間接に震災・原発事故からの復興の取り組みとつながっている。復興の歩みが国境を越えて語り継がれる挑戦であることも、本学ならではの国際感覚として学生と教職員に共有されることになる。

． 貢献性を重んじるカリキュラム

震災・原発事故からの復興の歩みの中から、あるいは技術・経営の革新的要素の普及の中から、各地で農林業・食品産業・地域社会の新たな潮流が生まれている。こうした流れの先導者もしくは後押し役として、本学類にも多くの期待が寄せられている。この点をカリ

キュラム編制に反映したのが、2年次後期と3年次に開講する履修コース横断型の農学実践型教育である。本学の教育理念である「問題基盤型学習（Problem-Based Learning）」の具体化でもある。課題の特定から解決策の提案に至るまで、現場との密接な交流を通じた学びの機会を提供する。市町村・農林業関係団体・関連企業等との連携により、7か所程度のフィールドが対象となる。

【履修コース別のカリキュラム・ポリシー】

[食品科学コース]

機能分析や新製品開発などに関する食品科学の知識・技能を修得し、地域の食の伝統的な強みを活かす応用力を身に付けるための科目を配置する。主要科目を食品機能系（食品機能学・、食品分析学、食品素材科学）、食品加工系（食品加工学・、食品保蔵学）、発酵・醸造系（発酵・醸造学・） 食品安全学とする。

[農業生産学コース]

果樹・園芸等を含めて作物学の知識・技能を修得し、病虫害や植物栄養に関する専門知識と応用力を身に付けるための科目を配置する。主要科目を作物系（作物育種学、稲作学、環境保全型農業論）園芸系（蔬菜・花き園芸学、果樹園芸学）病虫害管理系（応用昆虫学、植物病理学） 土壌肥料系（土壌科学、植物栄養学） 飼料資源学とする。

[生産環境学コース]

農林業を支える生産環境の実態と利用システムに関する知識・技能を修得し、最先端の農業技術を理解・活用するための科目を配置する。主要科目を森林系（森林科学、森林育成学、森林保護学、森林利用学） 農業環境系（里山管理論、農村計画学、水資源利用学、土壌物理学） 農業機械系（農業リモートセンシング、スマート農業論）とする。

[農業経営学コース]

農林業や食品産業の行動を社会科学の観点から分析する知識・技能を修得し、ビジネスの新潮流や協同組合・共有資源等を深く理解するための科目を配置する。主要科目を地域農業系（農業経営学、協同組合論） 流通系（食品マーケティング論、フードシステム論、農産物流通論） 農業経済系（農業経済学、農業政策学、農林資源経済論）とする。